

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520290

研究課題名(和文) 戦後イギリス社会におけるBBCサードプログラムのラジオドラマ

研究課題名(英文) Radio Dramas by the BBC Third Programme in Postwar Britain

研究代表者

川島 健 (Kawashima, Takeshi)

同志社大学・文学部・教授

研究者番号：60409729

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果として以下の三点がある。(1)ラジオドラマに描かれる、ウェールズやアイルランドなどのイギリスの境界に位置する国々が、新たに打ち建てられるEnglishnessに収まらない差異を表していることが判明した。(2)モダニズムのエリート主義にとって大衆は忌むべき問題であったが、ラジオが大衆に語りかける新しい言語を模索する手段として、ラジオドラマがあったことが分かった。(3)第一次世界大戦が多くの戦争詩を生んだが、第二次世界大戦に詩的表現を与えた作家は少ない。それに対して、BBCラジオは、戦争にたいする、より複雑な感情を代弁するメディアになったことが分かった。

研究成果の概要(英文)：The outcomes of this research are summarized into three points. First, exploring radio dramas set in the border countries such as Ireland or Wales, I found that they offer images which are not fit in with newly-founded Englishness. Rather, their localities provide a critique of the cultural centralization exemplified by the Arts Council. Secondly, my research examined that radio dramas were used by the BBC for exploring language with which to talk to mass. In contrast to Modernist elitism that despised the mass, the BBC radio's literary programmes contributed to broadening the possibility of literature. Thirdly, it is found that the BBC produced a number of war radio dramas. World War I famously produced many war poets, whereas there are less poems produced by World War II. The BBC's radio dramas on war made up for poetic depletion, and demonstrated more complicated feelings and emotions.

研究分野：英文学

キーワード：BBC ラジオ ドラマ 周縁 大衆 戦争

## 1. 研究開始当初の背景

2010 年前後より、戦後イギリスの文学・芸術を社会・政治的な観点から分析をした研究が盛んになってきた。第二次世界大戦後の福祉体制の成立によって編成された Englishness 表象に関する分析が行われつつある。本研究はその視点を引き継ぎつつ、BBC (The British Broadcasting Corporation) の Third Programme の分析を、ラジオドラマというジャンルから試みるものだ。

それまで研究代表者は Samuel Beckett の研究をしており、彼のラジオドラマの分析をきっかけに BBC に興味を持つことになった。1950 年代以降の BBC ラジオ、特に 1946 年に設立された Third Programme には、Beckett のみならず、Dylan Thomas や Harold Pinter などが脚本を提供し、非常に実験的な作品が制作、放送された。有名作家がメディアに脚本を提供し、冒険的な作品の創作を可能にした環境、社会状況を調査する必要を感じたのが本研究を志した第一の理由である。

予備調査の段階で戦後イギリスでは、様々な文化編成の変化がみられることが分かった。たとえば、Arts Council の設立や、国立劇場の創立である。このような文化の中央集権化にたいして、ラジオという伝播拡散のメディアが果たした機能を考査する必要が生じた。

また、第二次世界大戦やその後の旧植民国の独立、冷戦構造の確立など、国際関係に影響を与える大きな出来事があったが、そのような事件や変化にたいして、ラジオドラマは積極的に反応している。ニュースなどが報じる社会情勢と、ラジオドラマなど、文学者がスクリプトを提供するプログラムには、どのような見解の違いを示しているのか、分析を試みる価値があると思った。

## 2. 研究の目的

本研究は 1950 年代から 60 年代にかけてのイギリスの社会状況を背景に BBC Third Programme で制作されたラジオドラマを再評価することを目的にする。特に Dylan Thomas、Samuel Beckett、Harold Pinter、Tom Stoppard らの台本を題材にする。

(1) まずロンドンを中心とした、文化・芸術の中央集権的政策が生み出した、「都市」と「周縁」という二項対立をそれらのラジオドラマが覆していることを証明する。1950 年代以降、Arts Council や国立劇場の設立など、ロンドンを中心とした文化再編が行われ、文化発信が国家政策の一部となりつつあった。一方、BBC ラジオは、イギリス周縁国(ウェールズ、スコットランドなど)の地域を舞台としているドラマを量産する。その地域と人びととその暮らしがどのように描かれているか考察しながら、それが文化の中央集権化

とどのような関係を切結ぶのか考察していきたい。

(2) ラジオはそれまで特定の階級に特化してきた芸術、文化をより多くの人々に届けるようになる。特にラジオドラマは、劇場演劇をお茶の間に届けた。そのときドラマはどのように変質したか。また作品と観客(聴衆)の関係はどのように変化したか。特に考察すべきは、家庭の主婦たちが、ラジオが提供する文かプログラムをどのように享受し、反応したかである。

1950 年代後半から、イギリス社会に根差した新しい社会主義「ニューレフト」が生まれてくる。カルチュラル・スタディーズとともに、ニューレフトは、階級横断的な大衆像を Englishness として打ち立てようとした。それに対置してみたいのは、BBC ラジオのラジオフューチャーという、疑似ドキュメンタリーのジャンルだ。平凡な日常を記録するラジオフューチャーは、一見ありふれているが、通俗的な「大衆」像に還元し得ない「個」を描出しようとする試みであった。ドキュメンタリーは、ニューレフト以降の社会主義リアリズムにとって主要なテクニクとなったが、疑似ドキュメンタリーであるラジオフューチャーは、それとどのような関係にあるのか、探索する必要がある。

## 3. 研究の方法

本研究はテキストを読むだけでなく、実際に 1950 年代から 60 年代に制作・放送されたラジオドラマの音源を聴くことによって、英語発音や音響効果をも分析の対象にする。現在 CD や iTunes で入手可能なラジオドラマもあるが、それ以外は British Library の Radio Collections で聴く。台本も多くが出版されているが、未刊台本に関しては British Library に所蔵されているサードプログラムの各種スクリプトを利用する。BBC が刊行している様々な雑誌も分析対象とする。

研究の発表の舞台としては International Federation for Theatre Research や International Comparative Literature Association などを考えている。そこで得たフィードバックなどを利用し、原稿を書き直し、論文として発表する。

発表、投稿のサイクルで各研究論文の強度と精度を高めていく。

最終的には科研費による研究補助期間終了後二年をめどに、全 11 章の単著として出版する。

## 4. 研究成果

(1) BBC Third Programme のラジオドラマがイギリスの「周縁」を描くことが多いという自説を改めて確認することができた。ウェールズやアイルランドなど、イギリスの境界線

近隣の国々が、ロンドンを中心に、新たに打ち建てられる Englishness にはおさまらない差異を表していることが判明した。そこで描かれるのは、都市文化と二項対立の関係にあるローカリティではなく、植民地主義を清算し、小さな福祉国家として生まれ変わろうとするイギリス社会全体を批判する視座を有していることが判明した。

またそれ以外にも、ラジオドラマ制作とともに発展した様々な放送テクノロジーが、動物の鳴き声や方言などを再現にも活用され、多彩な表現に貢献したことが発見した。世界初のラジオドラマといわれた Richard Hughes の *Danger* で試された音響効果は、イングランドの英語と、ウェールズの英語の差異をつくりだすためであったが、それがきっかけになり、ラジオドラマにおける音響効果の重要性が認められたことを評価した。

(2) Third Programme において、「階級」が頻繁に言及される問題であったことが確認できた。モダニズムの作家たちは、ラジオが新しい知識層をつくりだし、これまでの階級安定性が失われることを危惧し、特定の知識層にのみ理解可能な言語を彫琢していった。それにたいして、BBC ラジオ放送は、作家たちを、それまでなかった規模の、不特定多数の読者／聴取者に直面させた。BBC に脚本を提供する作家たちにとって、大衆は、コミュニケーションの新しい対象であった。その際に作家たちは、人口に膾炙している古典作品のフォーマットを利用したり、大衆音楽を利用したりして、文化の大衆化を図っていた。文学と電波の出会いは、レトリックをつくりだしていったのだ。

(3) 第二次世界大戦にたいする、作家たちの様々な反応を考察することができた。アメリカに積極的な参戦を呼びかける、プロパガンダ的な放送をした Louis MacNeice や、戦争下における市民の連帯のかたちを描いた Dylan Thomas などの作品である。第一次世界大戦が多くの戦争詩を生んだのにたいして、第二次世界大戦に詩的表現を与えた作家は少ない。それに対して BBC ラジオは戦争への、より複雑な感情を代弁するメディアになったことが分かった。

戦後は、旧植民地に独立の機運が高まると、それらの国の独立を見守るようなプログラムが作られた。特に MacNeice や George Orwell がインドの独立に寄せる番組にスク립トを提供し、旧宗主国と旧植民地の新しい関係を肯定的にとらえようとした。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

川島健「戦争を知らない詩人たちの戦争の

うた——ディラン・トマスのラジオ」、『年報カルチュラル・スタディーズ』査読無、第3号、2015年6月、77-95頁。

〔学会発表〕(計3件)

Takeshi Kawashima, “Floating England: Voices in the Air in the BBC Third Programme”, International Federation for Theatre Research, 30 July, 2014, Warwick University, England.

Takeshi Kawashima, “A Voice from Peripheries: Dylan Thomas’s *Under Milk Wood* and Postwar England”, International Comparative Literature Association, 24 July, 2013, Université de Paris-Sorbonne.

川島健, “Voices from the Margin: Samuel Beckett’s and Dylan Thomas’s Radio Dramas for the BBC Third Programme”, 日本ベケット研究会、2012年7月8日、東京大学駒場キャンパス。

〔図書〕(計1件)

川島健「ラジオの描くモンスター——ルイス・マクニースの『ダークタワー』と大衆の問題——」、『幻想と怪奇の英文学2』、春風社、2016年6月出版予定、頁数未定。

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

川島 健 (KAWASHIMA, Takeshi)

同志社大学文学部・教授

研究者番号：60409729

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

( )

研究者番号：